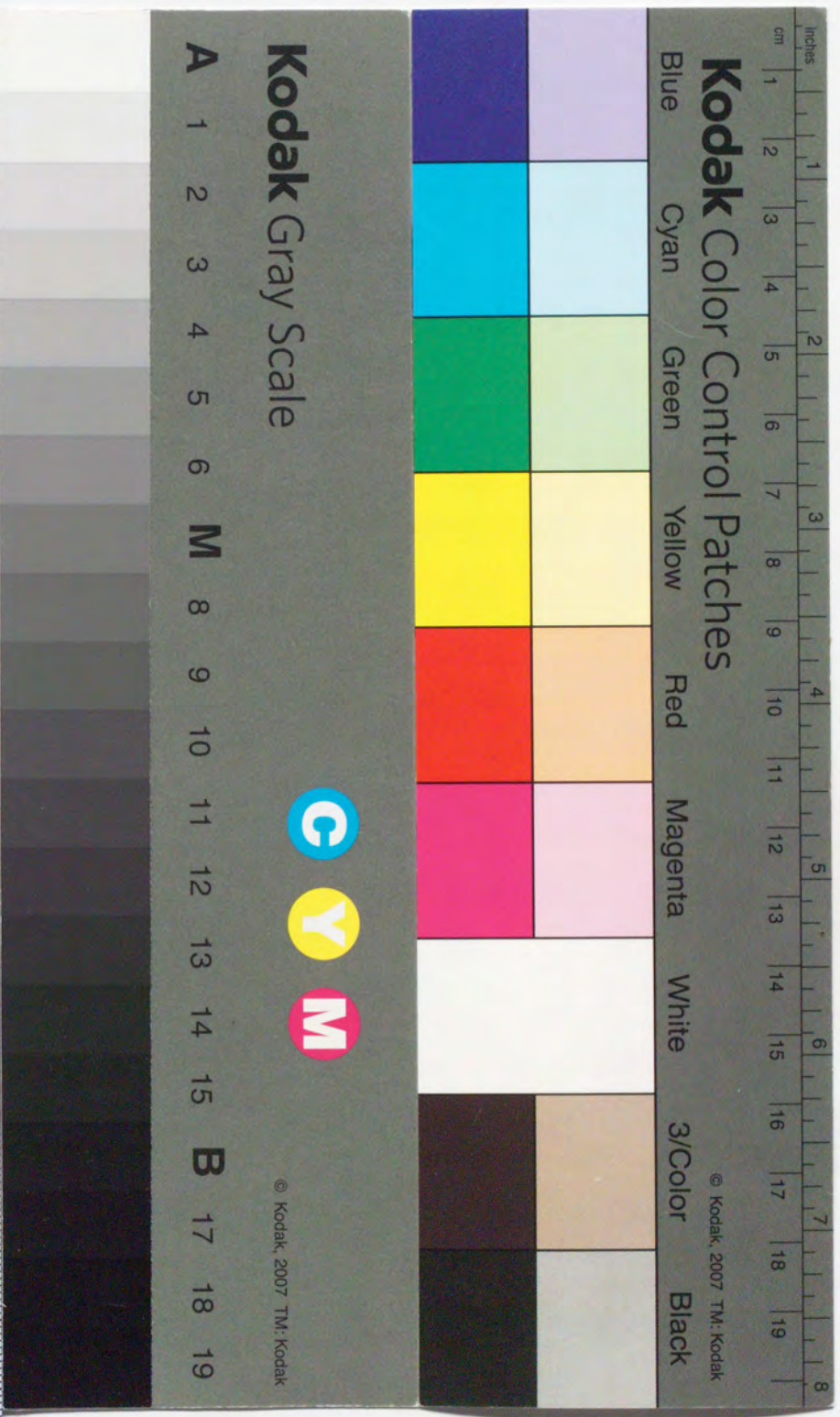




南總里見八犬傳第七輯卷之七

東都

曲亭主人編次

第七十面

仇を諺々奈四郎頭顱を喪
客を留々次團太闘牛を誇る

却説四守の城を還る。元元は宣する。指月院の勢。住持の元
僧を。知る。國中の士民。湯仰と。活菩薩と。稱する。虚名あり。あ
る。況彼二天。面魂實。一入當千の勇士。渠意を固。勤仕を
推辞。む。同。時。物を贈。日。月。恩。積。竟。心。傾。當家
隨後。ま。あ。ん。就。木。工。作。後。家。夏。引。る。良。人。を。害。せ。あ。る。縁。ど。も。
密。夫。奈。四。郎。が。木。工。作。を。殺。せ。し。ま。る。隠。し。て。惡。事。を。實。け。し。め。良。人。を
害。せ。し。ま。る。當。の。嚴。科。に。お。け。し。又。奈。四。郎。が。後。供。帳。内。に。月。比。主。の。惡。を。實。け。し。ま。る。

けく盗竊殘忍心せざるを。これ亦頭を刎究めざるは彼木三作が小厮出来
た。奈四郎夏引は悪事を知りて魯く夏引の謀れを信乃を誣んたる
の。其の罪の輕重ありて夏引木と同様の。渠は二百鞭を圍境より追
放する。餘の如く。如此と云。按て。元元を奉ずる形の。其を行ひ
し。夏引。内木。身首を異せし。戸を市に賣られ。賊を拘る。肥もある。隠
匿の報ひ。怕る。下め。程。猿石。村の故老。百姓。木三作。元元の下知を受て。木三
作。亡骸を。村人。昇々。指月院。送る。まはれば。大法師。受て。其の宵火
葬。あつて。登時。信乃。道節。照文。木三作。死後。名。迹。を。件。の。百姓。と
商量。親族。の子。と。ま。猿石。の。鄰村。四六城。氏。の。百姓。あり。則。木三作。が。養
父。五世。前。分れる。血脈。相續。の。氏族。れ。今。迄。疎遠。ある。四六城
氏。三箇。の。男子。あり。次男。右。才。あり。て。文筆。を。好め。其。の。身。を。下。と。い。三犬士

照文。ホ。然。び。濱路。姫。云。云。と。それ。の。よ。と。告。ま。う。木三作。が。白骨。を。半分
ち。の。一。壺。を。四六城。の。香華院。へ。葬。ら。め。即便。鄰村。の。四六城。氏。の。男。と。て
木三作。が。名。迹。を。下。と。約束。され。ふ。より。故老。の。百姓。們。が。媒。始。し。件。の。三男。を
呼。び。迎。へ。名。を。木三作。と。更。て。養父。の家。を。嗣。け。り。て。も。前。の。木三作。は。仕。へ。る。奴。婢
仙。人。木。も。又。後。の。木三作。は。役。を。た。家。を。び。栄。を。り。是。より。先。道節。信乃。木。の。の
宵。大照文。が。相。譚。を。う。姫。の。情。願。も。緯。十二。分。成就。し。これ。の。地。の。運。命。
う。何。と。され。國。主。信。昌。の。士。を。愛。め。良。お。俺。們。を。留。め。為。す。思。ひ。編
果。を。の。恩。竟。不。西。轉。と。り。て。立。ま。る。難。の。一。只。の。恩。を。受。め。る。先。他。郷。へ。遊。び
海。を。の。一。蜚。崎。生。も。の。誤。不。就。く。姫。の。の。見。供。し。て。安。房。へ。の。免。播。磨。に
必。後。悔。あ。ん。と。の。ま。大。照。文。も。異。誤。の。及。び。領。を。二。犬。士。の。意見。見。思。意。意。慥
へ。ま。う。今。より。起。行。の。准。備。を。せ。と。忘。果。と。り。立。ん。と。せ。照。文。を。道。節。急。小

とく。媼内と商量をなさし。媼内は、頭を傾け、近属両管領の没落せしより。
鎌倉兵火は荒れ、昔の鎌倉ふゆに陸奥中富米諸侯の城下より
えび世渡る便著きなり。奥多の大崎殿の御内人共、僕が故主あり彼処へ
赴かぬやういと真實なると薦めり。奈四郎との議の後ぞ、十一月の廿二日あり
三四日の比ありけり八王寺の客店を朝未明にお立ち出で、ゆるひ路を急ぎ登
時媼内の肚裡はさきう彼身の悪支幾覺れて、落人とありし主の後を追て陸
奥三鬼伶俚、おもむき頼りける甲府小在りし時、主と主後といわれし三
つらき面々の蜂を拂き優たり。早裏宿所の小簞笥より金を選り
とり、おの盤纏不足するべからん人家遠所ゆく結果、金を思召る
とも、落人あれば祟もあらず。分別を果さず、臍を噛とも及んや。いよく羽立哉
過すと、心なきおまを、月さる氣なく慰め、死なく同國の四谷原を

過ぐ程木下晡ふるより。天地の當時郊原の西南の麻の河の里あるに民
屋稀の疎林枝をまゝ岐道多くて冬時人を迷ひ既ぬる焔内を
惡心頻りに已れなくあき究竟の処へと歩み四下なる人絶てあり公
腰の帶より一刀を引拔きて声をけし背より走り懸りて奈四郎が脇を頂骨
おびと丁と破り砕かれて苦と叫び倒れんと踏留め抜かせんとする處を疊
うけて敷居の刀小太刀又頤を破れる奈四郎怒れる声を立て虎狼野心の奴
隷敵對の主をうる海の野間ある世を武藏野の逃水も終に脱れぬものぞ
天訓必ひあらんと倭僥たるから抜是れ毛刀を頻りにうち振りて斫らんと進
むを物ともせず噫小さら死天訓呼なり人を殺せば又殺さる報ひをぞくもの
まや年來の好む虫木ノ作を殺し其末をこの世で果さざる雲無の口を喰ふ
弥陀を念ふて死天の族十萬億土獨ゆく覺期せよと不敵の嘲弄又幾



本日の定ふとも 弥生まゝハ飼料一生涯より初を言ふと 折々餅を食し
 既に本日の定ふその牛の澤とくせん 蠟種或ハ油雜巾の幾遍も拭
 程は毛色日比十倍と就中黒牛ハ天鷲絨を包衣如く彼羽毛介子せ
 とる魯國の闘鶏又想像されての勇ハ北國の治習也戸々牛馬ハ
 初冬の比より 明年の二月月々皆是厩檻に用罷れて外は出るものある
 されハ秣は足り乳を養ふに肥太らぬと云ふ 況闘牛ハ此等牛のぬい
 物の費も敢厭ふを妻子女婢も牛の爲に用底鍾愛月比は弥増
 たり有此而本日ふなりぬれハ厩屋を各々牛ハ厩屋より牽出さる
 生るれもその意を欣然と之則足を屢大地蹴立る奮勇の氣色顯
 是る牛ハ南部の牧場より單中佐渡より地牛なり毛色も一より黄
 牛蒼牛黒白桃花四足白虎文額白牡丹紋より六出様その雜毛もさ

かる。故舉るま違ふは又形體も大小勇力勇猛を差あれ今
 定ふハこれけれども這回の大牛ハ逃入村多角連次牛田村多角右衛門
 虫亀村多角領本太郎木澤村多角餘之助蓬村多角二郎塩谷村多角
 辛之助小栗山村の判官ハこれハ牛ハ最も拔る俗ハ大関と稱へる只
 のまわぬともいふ大関ハ又その村落より出る牛ハ力士と唱へ究
 竟多角壯少者或ハ紺漆或ハ花田の山夾衣ハ紺の股引脚絆を穿ぬ又
 附融といふのを穿すも又甲も華を盡し或ハ袴の縫綴
 額ハ或ハ其倉或ハ白蛇縁をさめさるるもの多角肚甲ハ郡内結綿
 半ハ故ら美を盡し帶踏皮副帶多角拭きと風流戎吉とせ草
 鞋ハ白紙を締は括正紺の麻索も細とせ其の日を晴と装做せ
 七八十名もあべ中ハ木澤村多角雪車九郎荒屋村多角漏右衛門逃

入村多踏四郎小栗山村の越右衛門宗俊の大力士を合し牛を
牝より又牛裁判とありて東西の力士共備争ひを起し其村の甲右
を和寛く異小治むるを宗と牛史名を被け其村の甲右
漸く村の乙八まど呼ぶを地方の習俗と彼乙の各馬のど別名を
工へる一校隔明日貞約を闘牛の地所を討る塩谷木澤西村の境
節多く逃入荒屋虚木の二个村の合保より其地を借く當場とありて
地へ三方小山ありてその四角坦然る佃圃を借く絶とをその遠近なる連
山六林茂るは藩山多れも草葉いも萌出む処々斑消る遠山の雪ふ
霞天引く春色今あら小珍く枯結縷草の上は松布渡り出茶屋
あり酒舗あり蕎麥園子煮漆物餅駝果子と饗ふは只一日の
為ありてくをそのを知る鄰郷鄰郡の六は之遠近の老弱男を然

とくありて取合ひありて合高より見ありてと岡は依る能徊を抑
幾億萬人ある宛定塘渡る蟻小似る彼牛裁判補助人ありて
中々難く異ありてこれを鎮む力士六人隊を又看官の中より
吉いなる平坦ありて數十間より四下を彼此と徜徉を久し雪不閉竹龍れる
穀の牛ハ野邊球ありては高穀を敵むとありて大なるものハ高四
尺二三寸四五寸ありて鉢膝と名つけ角の饒ハ緋の縮緬或ハ紅
る圓統の紐を二面角を緘みその事の為体小目を数馬さぬあり
少と牛の期を俟負小折々高く吼る声物然と牛牯々々介の葛
盧ふありて何とあらんと知らねど御首霞霞を辟く彼淮南の丹
蛭々雪ふ入のけん勢あり月小喘なり其牛史似るやありて海内を
幾の壯觀に校角力の光景と衆牛の勝負ハ本日と俟くはてんあり

る。さうく彼四ノ曠垣る闘牛の地所を至れ。なほ収合ひ一老弱男女
あの日と暗と柱を倣く。衣の色々々花の如く丹楓。似て妖艶とく美
なる北國の風土。桃櫻の花さへ又只一時は綻びて彼此は白く翠を
含む楊柳の系は遠き春景色。鹿兒斑は消残は白
雪も亦愛する。日の雨後の晴天。一朶の雲。猛風。幾く連山。波濤。
似る青葱とて蒼蒼あり。白あり。小大。雨晴。密既。霞霞。龍め。硝道
稍春深。人取。後。問。く。高く鳥啼。谷の深を知る。寛歩。て。到る。処
奥。あ。む。と。の。あ。る。ゆ。て。磯九郎。正。面。る。岡。の。邊。は。草。々。然。と。布。儲。て。小。文。五。を
上座。請。登。る。身。の。傷。も。扈。後。の。回。る。を。具。は。さ。く。く。正。首。は。慰。め。ら
然。程。は。闘。牛。の。時。刻。あ。る。け。れ。村。人。各。々。彼。等。敷。置。る。牛。共。を。牽。ひ。牽
ひ。て。送。る。勝。負。を。決。め。む。の。支。の。為。体。今。の。相。撲。の。土。苞。入。攪。組。と。な。る。

異なる。且。その牛と牛とを闘。る。東。の。某。村。の。右。西。の。甲。村。の。兵。衛
と。呼。ぶ。名。士。と。看。官。を。知。わ。初。の。形。體。巨。大。な。骨。力。飽。ま。猛。々。と。
牛。と。これ。を。闘。中。の。大。な。む。又。小。な。強。さ。を。弱。さ。を。前。頭。を。牛。闘。後。
大。関。小。結。と。唱。ら。大。牛。の。強。勢。を。闘。ま。る。と。亦。是。今。の。相。撲。の。如。く。既。に
一。番。二。番。と。勝。負。を。争。ふ。の。を。知。る。且。東。西。の。牛。主。各。一。頭。を。牽。ひ。出。す。
牛。と。牛。と。相。距。を。闘。る。間。若。干。大。力。士。牛。を。解。放。て。雙。方。齊。一
奔。走。す。角。を。突。合。ま。る。或。は。迭。は。疾。視。て。左。右。を。見。る。鬼。は。相。遠。さ。る。
數。回。を。争。う。相。近。つ。て。突。然。と。額。を。合。し。角。を。膝。を。推。ま。る。亦。牛
を。解。く。と。亦。一。隻。の。角。を。田。と。鋤。け。圖。を。打。ぐ。大。地。を。數。回。數。回。進
ま。く。角。を。闘。る。牛。も。又。敵。を。進。め。進。め。俄。然。と。逃。る。亦。大。な。牛
を。解。く。と。亦。相。進。め。角。を。闘。る。牛。も。又。逃。る。亦。大。な。牛。の。推

戻し衝返され漸く眼中含血を朱を沃死する如く全體より汗を流し
 四箇の角を閉まる立直ぐとと遠くをえり角の勢ひ怖るゝ又も段々
 強牛どちら組で離れをれを突くを勢ひ迅速くり針を突外を忽地
 眉間を劈かれんとする目危く思ふれどよく煨煉と行つて中太牛の膝
 力大衆を敵まゝの角ををて投仆更に入角ををて突投まぐをえると力
 士小群鬼推隔く捷誇でる牛を駐む事及ぶと柱られ角牛の膝を
 突れ矢庭を敵死せざるゝ角の鋭きと鋒のどくを勢ひ並前を似こ
 ける故の東西の力士七八十名并絶の四方を輪立と聞ける牛の五間十間
 衝然とく推れと力力士も其の辟れ動散く縦横を尋は奔走され
 勝色を有る牛々の力士們の食飲を嘗と鳴く推ゆ牛は後く只洪波の
 打どくまるとを敵を群集の老弱瞬を彼や肩るん既ふを罵りまゝの

と相憐をまは汗と握るの各員は肩あけ牛角の勝負は争論あけ彼
 牛裁判の男東西の力士は決まぐ商量と牛主と員は肩あけを和寛
 るとを強弱の差ありとて既小肩色より牛の忽地角を退外と其奮
 直み逃走を野の力士未動揺々と追蒐と捕捕るを柄とまゝ追
 上の遅くを逃牛遠く走ると郊原田圃の差別と山林嶮岨の嫌
 忌む樹を倒し石を転を勢ひ名状まぐ況勝牛のれを逐る勇猛奮
 震十倍と當るをゆめをこの技の熟る力士は牛の左右を拘らむ
 横さるを衝とまを角を両方と握るを牛の前足をう足りと絡
 まぐ背尻を掛るゆめ或の牛の後足は推著尻或の尾は推乃を曳ぐ
 吊れらる駐るゆめこれゆめ優劣大牛の鼻をせん樹を死るの牛の要
 九と両方と相引駐れゆめなま怯む処を毛をく糾る牛麻糸を雞の羽を



討て逃歸る。須本太の爲脱とて其奮直を追蒐る。力士亦遂に推
著く捕捕んとせければ須本太弥怒狂て角は突破け空を投飛し反
倒を勢ひ當りてこれ投熟る力士亦駭騷に辟易と東へ奔れ西へ
靡く周章大なるあつり然程は須本太の角連次を索難て暴に
虐るるのれ四方は狂巡る人をも物も當る任と角は搦て投屠る
猛威は怖る群集の先弱東西は奔走南北は逃迷へ出茶屋酒店
果子蕎麥の牀几葭簾を踏潰さまで只膽を鍊ま可かれ小文五口と
磯九郎は逃る衆人隔られて迭々索る惶も中夜然にれ小文五の此も
騷る氣色も岡の下る小松の邊は磯九郎と俟程突然と走る須
本太の小文五を搦んとするを肉の反と角は楚と捕留り畢竟小文五
暴牛を推駐め後の話説のふれを第八輯の解分るを聴録し。

曲亭主人曰這個の闘牛の光景は越後魚沼郡塩澤の里長鈴木牧之が庚辰の
春三月廿五日彼地に到て目撃する圖説の中より抑闘牛の一奇事は越後雪譜
中載るのれも毎歳筆研繁るのれも創まる違わぬ且先歩様を
散る故のれも彼州に遊べば事足る歳月を歴るの故のれも牧之の企
望を空くせざる言のめ及ぶる寫真の圖を卷の五の簡端に見えたる
又曰予が著る冊子物語の三十年は及ぶのれも刻板若干散失之余
の故を多く刷出さるあり。刻板を求め足らば補刻すに
校訂を乞ふ。恐る画を易文を衍脱と再刷するあり。所云括頭巾
縮緬紙衣化競丑三鐘の他る不ある。予が名跡ありても補刻
予が校訂を経ず他人の成るもの。看官の爲ふものなり。

里見八犬傳第七輯卷之七 終

○著作堂手稿里見八犬傳第七輯画者筆目次

出像 卷一 二 三 四 并卷五 鬪牛圖 溪齋英泉

出像 卷五 六 七 并簡端有像一頁 柳川重宣

淨書 卷一 二 四 五 六 卷七 筑波 金仙 橋

○著作堂新舊国字绣像小説涌泉堂藏版畧目

里見八犬傳 初輯第六輯迄 三十一卷既行 家傳神女湯 ぬちのちのち 一包代百銅

同 第七輯 本編七冊 かの度出版 精製奇應丸 大包代式茶 中包代友平 包代平

勸善常世物語 全五冊別入補刻の 本より依之舊本 熊膽黒九子 多くのををす 一包代五銅

大阪	河内屋喜兵衛	東京	須原屋茂兵衛
同	伊丹屋善兵衛	同	山城屋佐兵衛
同	敦賀屋九兵衛	同	小林新兵衛
同	秋田屋太右門	同	九屋善七
同	河内屋茂兵衛	同	和泉屋市兵衛
同	河内屋和助	同	須原屋伊八
同	秋田屋市兵衛	同	出雲寺萬治郎
西京	出雲寺文次郎	同	概屋喜兵衛
同	村上勘兵衛	同	辺江屋半七
同	勝村治右衛門	同	長門屋龜七
同	杉本甚助	同	三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舗 和泉屋古兵衛發售

